

『日華(台)親善友好慰靈訪問団を代表し、

原台湾人元日本兵軍人軍属三万三千余柱の御霊の御前にて

慎んで祭文を奏上いたします。』

祭 文

『凡生ヲ我國ニ稟クルモノ誰カハ國ニ報ユルノ心ナカルヘキ』(「軍人勅諭」より)
『爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ』(「教育勅諭」より)

これは明治十五年の軍人勅諭と同二十三年の教育勅語の一節であります。この中で明治天皇は、阿片戦争の勝利に酔う欧米列強の重圧をはね返し、新生日本を守り、世界に伍して建国していく御意志と、これを担うべく国民のあるべき姿をお示しになりました。

このようなかで明治二十八年、台湾の皆様は日本人になりました。日清戦争に敗れた当時の宗主國・清が「鳥もさえずらない、木々には花も咲かない」といつてこの台湾を「化外の地」と切り捨て、わが國・日本に永久に割譲したからであります。

爾来、日台両民族の渾身の努力により、わが國でも有数の豊かで慈愛溢れる地となった台湾は、欧米諸國の羨望の的となり、支那大陸における満州國と同様に、国家建設のお手本とされるまでになりました。これは軍人勅諭として收斂されたわが國の武徳の伝統と教育勅語に凝縮された民族共同体の理念を台湾の皆様が真心をもって受け止め、漲る意氣と使命感をもって体現されたからに他なりません。

しかるに、昭和十六年十二月八日未明の大東亜戦争勃発により台湾の運命は大きく変わりました。今、御英霊として眠っておられる皆様は、南海の島々や熱帯の密林においてコミンテルン(国際共産主義運動)の陰謀に組み込まれた欧米列強と、また支那大陸においては蒋介石他率いる軍閥政權や共産匪賊と呼ばれたボルシェビキと生死を賭けて戦った同胞でした。とりわけ七百倍ともいわれる難関を突破し、血書歎願をしてまで志願してこられた皆様は、日本人以上の日本人として歴史に残る勇猛果敢さを発揮され、敵を圧倒し悩ませたのであります。

國家・國民の総力を挙げた三年と九ヶ月にわたる戦いにより、わが國は國家の尊嚴と民族の名譽を死守し、大東亜解放の壮圖を成し遂げました。とまれ、わが國が軍事的敗北を余儀なくされたとはいえ、四百年以上に及ぶ欧米列強の植民地支配に終止符をうち、アジアにおける全ての權益を失わせしめたのは紛れもない世界的事実であります。

これを偉業といわずして一体何と呼べばいいのでしょうか。わが國の國民として東洋平和のために共に血と汗を流した者同士の兄弟感・一体感はかくして形成されました。台湾の皆様が五十年間の日本統治時代の伝統や文化、はては「大和魂」を高く評価し、これを日本精神として継承している世界に類を見ない親日的な國家・國民である由縁はここに淵源があるのです。私達は、この様な台湾の皆様の勲と誠心に応えるためにも積極的に家族交流・兄弟交流を深め、その紐帯を今まで以上に強固なものにしていきます。それは今日の私達日本人に民族としての自覚と誇りを高めてゆく契機になると同時に戦後一貫して仕掛けられている情報戦に勝ち抜き、日米のみならず日台の分断工作に余念のない中共の攻撃を破砕する強力な桿になるからです。

平成十一年以来、私達は宝覺寺における「原台湾人元日本兵軍人軍属戦没者大慰靈祭」に参列させていただき、三万三千余柱の御霊の安らかならんことをお祈りしてまいりました。今後

も、この顕彰事業を風化させることなく、更に充実・拡大し、若い次世代に継承してゆくことが、「日本人として散華された御英霊」にお応えする私達の務めであると考えております。

以上の決意も新たに、わが國の近代史に類稀なる勇氣と献身を刻まれた御英霊の御遺徳を偲び、御霊の平安を心より祈念し、慰靈の言葉といたします。

日台の生命の絆 死守せむと

吾 日本の一角に起つ

平成二十二年
民國九十九年
皇紀二千六百七十年

十一月二十五日

日華(台)親善友好慰靈訪問団

団長 小菅 亥三郎